

# 平和情事一犬とかごー

安幸 広

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

犬夜叉とかごめのその後を描いた短編小説です。

平和な世の中で愛を育む二人。

しかし2人には大きな悩みが…？

※サーセン、R指定させて頂きます。

※連載しますが、多分すぐ終わります。

目次

第3話  
第2話  
第1話

6  
3  
1

## 第1話

「あれからみんな少しずつ変わったんだね」

「そりゃあんなに時が経てばな…」

犬夜叉はかごめの横顔を見ながら答える。かごめがこの世に戻ってきて1週間になる。

「そういえばかごめ、もうこの世になれたか？随分あつちの世界にいたから鈍ってただろ」

奈落との戦いを終え、かごめを元の世に返した瞬間骨喰いの井戸が閉じた。一生会えないかと思った。しかし2年後、再び井戸から帰ってきたかごめ。奇跡に思えた。

「そうね…でもだいぶ慣れたわよ！みんなサポートしてくれたし！」

「なんでえ、サポートって」

「あ…手助けよ！珊瑚ちゃんや七宝ちゃん、楓ばあちゃんが色々教えてくれたから！」

「そうか…なら良かった」

と言いつつ、少しばかり苦労したのは内緒である。葉草の種類やこの村のしきたり、弓の扱い方などほぼ忘れていた部分が多かった。

「あはは、それにしてもあの戦の毎日が嘘みたいね…」

犬夜叉、かごめともに平和な世の中で一緒に暮らせることを喜んでいた。

「帰ろうぜ、そろそろ日が暮れる」

「うん！」

その夜。

「すごいわよねえ、弥勒様と珊瑚ちゃん！子ども3人も生まれて…子宝に恵まれてるわね」

「いつも俺はあの子どものおもちやになってるぞ」

「まあまあいいじゃない、襲われるわけでもないし（笑）」

「けつまあそうだけだよ…」

そんなたわいもない話をしている最中にも、犬夜叉は悩み続けてい

た。

《俺とかごめは子を作っていいんだらうか?》

犬夜叉は半妖。当然、子どもどころ受けてきた差別やいじめ、そして母への他者からの冒瀆は今でも心に焼き付いている。

《かごめと子を作れば... 子とかごめがいじめられる...》

そんな思いが犬夜叉の心にあった。

《いや、そんな奴俺がぶっ殺してやる... いや、人間を傷めつけると逆にかごめが悲しむか...》

そんなことをかごめが帰ってきてからずっと考えていた。

「犬夜叉?」

「んお!?なんだ?」

「いや、なんかボーツとしてたからどうしたのかなって」

「い、いや何でもねえ!ほら寝るぞ!」

「えっ早くない!」

「うるせえ!ほら、布団に入れ!」

こうして1日が終わる。正直、考えて1日が終わる感覚はもううんざりだった。

翌日。

「おい、弥勒」

「おや犬夜叉、今日は遅いですね」

いつもは朝早い犬夜叉だが、今日は昼に外を出た。

「どうしたのです、こんな昼間に出てくるなんて」

「うるせえ、昨日の夜考え事してたら起きるのが遅くなっちゃったんだよー!」

「考え事...?」

「うっ... まあ、弥勒には相談していいか...」

「どうしたのです、まあ向こうの河原にでも行って話しましょう」

そうして弥勒と河原へ向かった同時刻。かごめと珊瑚。

「ねえ珊瑚ちゃん。相談、いいかな...?」

「...? 珍しいね、どうしたんだい?」

ほぼ同じ時刻。二人は全く同じ質問をしていた。

## 第2話

?子作りがしたい!?!?

弥勒と珊瑚はそれぞれ別の場所で驚きの声を上げた。

「弥勒… そんな驚かなくなつていいだろうがよ…」

犬夜叉が軽くイラついた表情を見せる。

「何たつて犬夜叉、また急に…」

「いや… あのよう…」

弥勒が驚くのも当然だった。犬夜叉がそんな悩みを持っていたとは…。

「とりあえず… 何でそう思うように?」

「いや… 一応俺とかごめは結ばれた、ただ… ただ子が欲しいと思っただけだ…。かごめとの子が欲しいだけだ…!」

言いづらそうに口を開いた。

「俺はずつとかごめを待ち続けた。忘れようとも思った。でも忘れられなかった。かごめの笑顔、匂い、声… 全部忘れられなかった。したら… かごめは戻ってきてくれた…」

かすれた声で犬夜叉は続けた。

「もう2度と離したくない。俺がこれからずつと守ってみせる。そう考えた中で… なんか芽生えてきたんだ。かごめの子が欲しいって… 自分でもよくわかんないけどよ…。」

これが犬夜叉の本音だった。

「なるほど… では行為に移ればいいのではないですか? 相手が犬夜叉ならかごめ様も受け入れてくれるとは思うのですが」

「違い…」

犬夜叉は続けた

「かごめは… 俺と確かに一緒に旅をした。一緒に気持ち共有してきた。妻になった。だがよ… 俺をそこまで受け入れてくれるかはわからねえ… もしかしたら交尾が嫌いな可能性だってあるだろ。

あと…。」

「あと?」

「… 心配なんだ。生まれてくる子が俺みたいにいじめにあつたりかごめを非難するやつが現れたりするのが…」

犬夜叉の声は普段の威勢のいい声とはかけ離れた弱弱しい声をしていた。

「そうでしたか…」

弥勒が立ち上がる

「犬夜叉らしくないですな。」

「んだとお!？」

犬夜叉が声を荒げる。

「確かに心配な気持ちもわかります。犬夜叉の過去を考えれば当然のことでしょう。しかし…」

「なんだよ？」

「この村であなたを嫌な目で見ている人が1人でもいますか？」

「わかってる… わかってるけどよお…」

「実は皆かごめ様との子を楽しみにしているですよ。」

「なんだと…?」

「皆、犬夜叉の境遇を理解しています。過去人間にいじめられたことも、妖怪として認められなかったことも。でもあなたはこの村を守ってくれた、そして大切な人と結ばれた。皆半妖であるあなたのことを慕っているのですよ。」

「…」

「そして皆が望んでいること。それは犬夜叉に家族が出来ること。あなたの父上と母上はずっと前に亡くなっている。真の家族の温もりを知らない犬夜叉に、そして子どもに… 幸せになつて欲しいのです。」

「そんなことを皆が…」

「同じ気持ちを共有してきたかごめ様です。必ず受け入れてくれるでしょう。」

「そうだな… 俺が弱音吐いてちや駄目だよな…」

「ちようど明日は山に傘がかかっていますので雨になるでしょう。かごめ様もお仕事が無いと思いますし、ゆっくり出来ると思いますよ。」

「そうか… じゃあ今日…」

「あ、行為の感想、待ってますよ（ニコッ）」

「てめえ… 覚えてろよ…」

その頃、かごめと珊瑚——



### 第3話

?子作りがしたい!?!?

「しーっ!珊瑚ちゃん、声大きいって!」

珊瑚も弥勒と同じように驚いていた。

「どうして?」

「うん、やっぱり犬夜叉と結婚したわけだし、子どもが欲しいなって。

ママも子どもの顔見たいって言ってたし。でも..」

「でも..?」

「う..あの..」

急にかごめが頬を赤らめ始める。

「あのね..えっと..」

「?」

「その、珊瑚ちゃん誰にもこのこと言わない?」

「え..うん」

珊瑚は不思議そうな顔でかごめの顔を覗き込む。

「あのね..珊瑚ちゃん..」

「うん」

「私ね、シタことないの」

「えっ」

突然のカミングアウトに珊瑚は一瞬固まった。

「えっと..男の人とまだ交わったことないの?」

「うん、だから何もわからなくて..」

「なあくん、そういうことね。」

珊瑚は笑って答えた。

「大丈夫よ、私も弥勒様が初めてだったけど心配することないわ。弥勒様とても丁寧で..」

「何が丁寧なの?」

「あつ..いや何でもないよ。最初は少し痛いかもね。」

「やっぱり痛いんだ..聞いたことある。」

「でも犬夜叉はかごめが大好きだから、乱暴なことほしなと思うよ。」

楽しんでね（ニッコリ）」

「はあ… 大丈夫かな」

「犬夜叉から色々求められると思うけど… 頑張つてね！じゃ！」

「ねえ、何を求められるの？ちよ、珊瑚ちゃんつてばあ！もう…」

「（頑張つてね… かごめちゃん。なんか私までドキドキしてた。… 私も弥勒様久しぶりに誘つてみようかしら…）」

「不安だけど… 犬夜叉に話してみよう。」

「ほほう、かごめ様が子どもが欲しいと…？」

「ええ、今日犬夜叉と話してみるそうよ。」

「驚きましたな… 実は同じ相談を今日犬夜叉からされましたよ。」

「そうなの!? やっぱり意思疎通凄いわね、あの二人…」

「犬夜叉、不安がつてましたよ。なんせ初めての試みですからな。」

「かごめちゃんも… 大丈夫かしら。」

「犬夜叉のことですし、乱暴なことはいしないでしよう。問題はかごめ様が初めてとなるとやはり…」

「うん、破瓜の血が出るし痛みも…」

「かごめ様のことだ。奈落を倒した方ですし、耐えてくれるでしょう。」

犬夜叉の技術次第ですね。」

「そうね… ねえ、弥勒様？」

「なんででしょう？」

「私… 犬夜叉達と同じことしたいな…♡」

「なんと？ 私もしたいと思ってましたよ。おいで、珊瑚」

「弥勒様！／／／／」

——その頃、犬夜叉とかごめ——